

2018年(平成30年)12月11日(火) (23)

持田 誠 (北海道大学総合博物館研究員)



年末、主要都市の街頭には、鍋をつるした三脚の姿がある。はたためく「社会鍋」の文字。濃紺の制服に赤帯の制帽をかぶった人々がラッパを鳴らし、道行く人々に募金を訴える。年末の風物詩、救世軍の社会鍋である。

集まった募金は、東京・神田にある救世軍本営へ集められ、街頭生活者の支援や災害救援活動などに充てられる。私もかつて札幌で救世軍札幌小隊の人々と、路上生活者への炊き出しをしたことがある。

社会鍋の歴史は古く、国際的だ。世界初の社会鍋が現れたのは、1894(明治27)年のアメリカ。救世軍サンフランシスコ小隊

が、年末に貧しい船員家族へスープを贈るため、スープつぼをつる

年末の社会鍋

して募金を集めたのが起源で、「クリスマス・ケトル」と呼ばれた。

日本では1906(明治39)年の日露戦争不況の際、貧窮家庭の年越しにと、ミカンや餅を籠に詰めて贈った「慰問籠」がルーツとされる。3年後には、クリスマス・ケトルを参考に現在のスタイルが確立。年末の募金運動そのものの始まりとなり、今日の「歳末たすけあい」へつながっていったと考えられている。

救世軍はイギリス発祥のプロテスタント教会の一派だ。「心は神に手は人に」を合言葉に、救世軍人たちは、社会鍋を通してキリスト教の精神に基づき愛を実践しているのである。

政財界が景気回復を言う半面、巷(ちまた)では子供の貧困が深刻な日本の年末である。社会鍋を見掛けたら、ぜひ心を寄せようではないか。

Re:北メール